

在するのみで膵実質は認めなかった。

本症例は副膵管を認めず、インスリン分泌不全があることから先天性の膵体尾部欠損症と考えられた。

## 2) 胆嚢 adenomyomatosis

—胆嚢癌・胆石症・胆嚢炎との関連を中心に—

大谷 哲也・白井 良夫  
藤田 亘浩・加藤 英雄  
黒崎 功・富山 武美  
塚田 一博 (新潟大学第一外科)

胆嚢 adenomyomatosis のうち segmental type の底部側粘膜に胆嚢癌が好発することは既に報告した。今回は胆嚢 adenomyomatosis と胆石症、胆嚢炎との関連及び診断上の問題点を中心に報告する。過去8年間に当科で切除した胆嚢結石症411例、無石胆嚢炎6例を対象とした。胆嚢結石症のうち adenomyomatosis は93例に認められた。このうち segmental type は66例(16.1%)であり、高率に胆嚢結石症と合併していた。segmental type を伴う胆嚢結石症の平均年齢は53.3才、segmental type を伴わない胆嚢結石症の平均年齢は57.8才であり、前者の平均年齢は有意に( $p < 0.01$ )若かった。無石胆嚢炎6例のうち2例(33.3%)は、diffuse type の胆嚢 adenomyomatosis であった。胆嚢 adenomyomatosis の診断は困難であり特に癌との鑑別は問題となるが、自験例においても術前・術中に胆嚢癌と誤診され根治手術が施行された良性疾患4例のうち2例は胆嚢 adenomyomatosis 症例であった。

## 3) 胆管癌との鑑別が困難であった Intramural stone を伴う良性胆管狭窄 (Bm) の1切除例

杉本不二雄・丸山 明則 (頸南病院外科)

64歳、男性、T. Bil. 22.0の閉塞性黄疸にて受診、入院した。PTCD及びERCPの胆管像にて、Bmに3.5cmの、辺縁不整な全周性狭窄像を認め、中部胆管癌の診断にて手術を施行した。

術中所見では、中部胆管から膵頭部にかけて直径5cm程の一塊の腫瘤を認め、総肝動脈及び門脈に浸潤を認めた。進行胆管癌と判断して、膵頭十二指腸切除術、門脈及び右肝動脈、総肝動脈合併切除にて切除した。(幸い、左肝動脈は、左胃動脈から分岐していた。)

切除標本では、胆管周囲の硬化が総肝動脈、門脈を包含していたが、腫瘍、結石や膵炎は認められなかった。病理組織検査では、Cholangitis with segmental narrowing

of the middle to lower bile duct and marked serositis, intramural stone (+), No malignancy の報告を得た。

本症例の如く、胆管像のみでは一見して胆管癌と思われる症例でも、良性狭窄であることも希にあり、術前診断が不確実な場合には、PTCSによる観察や直視下生検も必要と思われた。

## 4) 大網を利用した新しいインスリン門脈内投与法 (第2報)

—人工膵臓を併用して—

佐藤 攻・清水 武昭 (信楽園病院外科)  
杉本不二雄

糖尿病を合併した症例に対し、人工膵臓の制御下に我々の開発した方法で門脈内インスリン投与を行い、血糖管理が難しいとされる術中より積極的にブドウ糖を投与しながら血糖値を厳密に管理し得たので報告する。

[方法] 生理的条件下に近いインスリン投与で血糖管理が可能な門脈内インスリン投与法に、人工膵臓(STG-11A)を併用した。肝硬変合併肝細胞癌3症例(2症例は術前よりインスリン使用)、および糖尿病を合併した胃癌1症例、直腸癌1症例(慢性血液透析例)の計5症例に手術開始時から目標血糖値を150mg/dlに設定し、厳密な血糖コントロールが可能かどうか、その際のインスリン投与量はどれくらいになるのか、また臨床的有用性などを検討した。

[結果] 肝切除症例ではインスリンの総注入量は100単位以上となった。またいずれの症例においても術中術後に目的とした血糖値のコントロールは正確に可能であった。その間のブドウ糖投与量は平均7.2g/hrであった。

[結論] 我々の開発したインスリン門脈内投与法に、人工膵臓を併用すれば、術中といえども正確な血糖コントロールが可能であった。

## 5) 小腸側々吻合術後 blind pouch 穿孔の1治験例

伊達 和俊・加藤 知邦  
斉藤 博・三科 武 (鶴岡市立荘内病院)  
八木 実・鈴木 伸男 (外科)

小腸側々吻合術後 blind pouch 穿孔例の報告は比較的少ない。今回、我々は61歳男性で40年前に汎発性腹膜炎で手術を受け、本年4月間欠的な腹痛、嘔吐、下痢で発症し緊急入院となった blind pouch 穿孔症例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。入院時現症